

書 評

Philip Clayton, Zachary Simpson Editors,  
*The Oxford Handbook of  
Religion and Science*

(Oxford University Press, 2006)

フィリップ・クレイトン，ザカリー・シンプソン編  
『宗教と科学ハンドブック』

小 柳 義 夫

本書は、宗教と科学に関する 56 編の論文をテーマ別に編集したものである。主編者の Clayton 氏はクレアモント神学校の教授であり、数年前 Templeton 財団の支援により SSQ II (Science and Spiritual Quest II) という 3 年間のプロジェクトを主宰したが、評者はこのプロジェクトのコンピュータ科学分野に参加したのでよく存じ上げている。また、編集委員会を構成する John Polkinghorne, Ian Barbour, Nancey Murphy や、何人かの執筆者は、2002 年に発足した ISSR 学会 (International Society of Science and Religion) の中心メンバーであり、学会の会合でよく拝見する。Polkinghorne や Barbour の著書のいくつかは日本語にも訳されている。

本書はハンドブックという書名であるが、中立的な立場から書かれている訳ではなく、各論文は執筆者の学問上の立場に立脚して書かれている。インテリジェント・デザインのようないくつかのホットな問題については、賛成論と反対論の双方を収録している。宗教と科学というような分野では、中立的に書こうとすると面白くないものになりかねないので、適切な編集方針であろう。本書には詳しい索引が付けられているので、特定のテーマについてどんな見解があるかを知るには大変便利である。

内容の詳細に至るまで議論することはできないが、概略を紹介する。第1部は、「世界の宗教伝統における宗教と科学」というタイトルで、ヒンドゥー教、仏教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、部族宗教などと科学との関係、さらには、宗教的自然主義、無神論と科学との関係が論じられている。それぞれ大変おもしろく、よくもこれだけ集めたと感心するが、論文が相互に十分かみ合っているとは言い難い。また、何々教といっても科学に対する姿勢は多様であり、統一見解があるわけではない。従って各執筆者は自分の見解を述べているに過ぎない。たとえば、仏教について B. Allan Wallace (Santa Barbara Institute for Conscientious Studies) という人が書いているが、仏教はキリスト教などの宗教概念とは違うということを強調しながら、幸福、苦しみ、自意識、倫理などについて論じている。しかし科学との関連を議論するには、中国や日本の現世利益的な仏教も重要ではないかと思われるがその議論はない。キリスト教については Polkinghorne が書いている。かれは元々評者と近い分野の著名な物理学者であったが、49歳で神学校に入り英国国教会の司祭となった方である。「神は物理的世界にどうかかわるか」という問題をかかなり広い立場から論じていて読み応えがある。

第2部は逆に現代科学の代表的なトピックを軸に宗教との関係を論じている。取り上げられているトピックは、宇宙論、基礎物理学、分子生物学、進化論、エコロジー、脳科学、心理学、社会学、人間学である。ただし、ここで対照されている宗教は主としてキリスト教であり、第1部で論じられたような多様な宗教伝統が取り上げられているわけではない。宇宙論では、天文学と原子物理学によって神様の居場所がなくなったことを指摘した後、いわゆる「微調節」の問題が新たに神様の居場所を作る可能性があることを述べる。微調節とは、宇宙が今の形で存在し、地上に生物が発生して人間にまで至っているためには、種々の物理定数や初期条件が極端に微妙に調節されてなければならないということである。このこと自体は客観的な科学的事実であるが、そこに神の介入を見る人もいるし、「そうだからこそたまたま我々が存在して科学を研究しているのだから当然だ」という人間原理を主張する人もいる。微調節と人間原理については、他の何人かの執筆者も言及している。

第3部は宗教と科学が関係しているいくつかの特定の分野を取り上げ

ている。科学史と宗教，社会科学と宗教，科学哲学，哲学的神学，組織神学，実践神学と倫理，スピリチュアリティなどが論じられている。

第4部は宗教と科学を論じるための方法論が議論されている。進化・文化・認知，自然主義，ホワイトヘッドのプロセス哲学，ポストモダン，知解を求める信仰，宗教体験と認知科学，方法論的多元主義などと宗教との関係が論じられている。

第5部はいわばこの書の中心であり，宗教と科学における中心的な理論的論点がいくつかに整理されて詳しく論じられている。まず「『科学と宗教』か『神学と宗教』か」のセクションでは，科学と対照される宗教とは何か，宗教と神学とはどういう関係があるかが議論されている。次のセクションでは，自然に対する神の介入の問題が取り上げられている。古典物理学では，自然は決定論的に動いているので，奇跡を別にすれば神の直接介入を考える必要はなかった。しかし，量子力学は本質的に偶然的であるので，そこに神の介入を見る見方もある。

3番目のセクションでは万有内在神論 (panentheism) が科学と宗教との対話の基礎になるのではないかという可能性が議論されている。万有内在神論とは，神と宇宙を同一視する汎神論 (pantheism) とは異なり，神のなかに宇宙が内在するという考え方である。Polkinghorne を始め他の執筆者もこれについて論じている。次の2つのセクションでは，進化論とインテリジェント・デザインの問題が種々の立場から論じられている。現在アメリカで政治問題となっているインテリジェント・デザインについては，推進の第一人者である W. A. Dembski が擁護論を，R. T. Pennock が反対論を書いている。その次のセクションでは複雑系の科学，特に創発の概念が科学と宗教の問題にどう影響するかが論じられている。次のセクションでは，フェミニスト的なアプローチが紹介されている。最後のセクションは人間性と倫理の問題が議論されている。

第6部では，価値の問題という表題で，エコロジー，倫理，バイオテクノロジー，動物保護などの問題が議論される。H. Rolston III は，科学と宗教の問題が，今や地球規模で論じられなければならないと指摘し，人口やエネルギー消費のデータを示しながら，救いの問題は環境倫理の視点から再考されなければならないと論じている。

欧米の感覚では，宗教 (religion) とはつまりキリスト教のことであ

り、広げてもせいぜいユダヤ教とイスラム教までである。この三つはよくアブラハム宗教 (Abrahamic religions) と呼ばれ、共通性が高い。これは日本で宗教というと仏教の諸派が連想されるのと好対照である。従って「宗教と科学」と言っても、主としてキリスト教と科学の問題が課題となる。われわれ日本人としては (日本の) 仏教や神道と科学との関係についても興味があるが、これはほとんど扱われていない。むしろ、われわれへの課題であろう。数年前、SSQ II のプロジェクトの一環として、東京で「科学とこころ」というシンポジウムを企画したが、仏教や神道の立場から科学について論じることのできる講演者を捜すのに大変苦勞したことを覚えている。

宗教が多様であると同様に、科学も多様である。19世紀までの科学は、ニュートン力学とマクスウェルの電磁気学とで記述される決定論的な世界像に基づいていた。20世紀になって、相対性理論と量子力学の成立により、時間空間は相対化され、また世界は確率論的であること、すなわち世界には本質的な偶然性が内在することが認識された。これは科学と宗教を考える枠組みを大きく変更した。さらに20世紀末になって、宇宙論の発展、生命科学や脳科学の発展により、さらに複雑系とカオス系の科学の登場により、われわれの世界観は大きく変わった。たとえば、デカルトに代表される理神論的な考えでは、神は法則を定め、宇宙の初期状態を設定した後は、一切介入せず法則に任せる。これは神様が不在地主になってしまうという欠点はあるが、科学者にとって都合の良い宇宙観であった。しかし20世紀の科学は、物理的宇宙の過程に本質的に内在する予測不可能性、すなわち量子論の不確定性とカオス系の不確定性のゆえに、このような機械論的な宇宙観は成立し得ないことを示した。

J. Haught によると、科学と宗教との関係については、conflict (宗教と科学は対立する)、contrast (宗教と科学は全く別の体系である)、contact (宗教と科学は区別されるが関係がある)、confirmation (宗教は科学を支持する) の4つの類型があるとされる。啓蒙主義時代以来、宗教と科学は対立し、宗教は科学を迫害してきたと考えられている。逆に、カトリックの聖職者たちからは、現代の諸問題はすべて科学技術のせいだと、しばしば科学は悪者にされている。これらは conflict の見方である。また宗教に好意的な科学者でも、せいぜい宗教と科学は別の体系で

あり、相互不可侵だと考えられているに過ぎない。これは contrast の考え方である。

しかし本書の方向性は、両者の間により積極的な関係を作り上げようとするものである。宗教と科学がいかに関係するか、またいかなる意味で宗教は科学をサポートするのか、これは宗教・神学の観点からも、科学の観点からも重要な問題である。注目すべきことは、「科学と宗教」という問題について多くの蓄積がなされ、一つの学問分野として成立しつつあることである。残念ながら日本では、科学と宗教の問題は学問の課題というより人生観のようなものと考えられている。これでは科学と宗教の研究を学術的に進めることはできない。しかし欧米では多くの国際会議が開かれ、専門的な議論が行われ、大学の講義が開設され、国際学会が結成され、この分野は未曾有の速度で成長している。本書はこのような努力の一つの成果である。類書として、J. Wentzel Vrede van Huyssteen 編“Encyclopedia of Science and Religion” (Thomson/Gale, 2003) という 2 巻の百科事典がある。実は、評者はこの本に執筆を依頼されたが、自信がなくお断りした経緯がある。

宗教者は科学に疎く、科学者は宗教や神学・哲学に疎いのが現状ではあるが、宗教と科学が 21 世紀により進んだ関係を確立するには、本書のような蓄積が今後ますます必要になるであろう。